

★能力開発の哲学とテクノロジー

JADEC ニュース NO.84 2011/5/20

【 も く じ 】

- この震災から学んだこと、学ぶべきこと
これからの日本に必要なこと ……………2
- 仙台市ガス局、がんばっています ……………6
- アンテナ「この国の失敗の本質」「節電ポスター」……8

巻頭言

共に生きる姿勢

朝日新聞のニューヨーク支局長が3/16朝刊「ザ・コラム」欄に、『逆境のジャパン 立ち向かう姿に讃嘆のまなざし』と題し、このたびの災害に対応する日本人の姿を見て感じた各国の人々の声を紹介した。

■日本人は誰もパニックに陥らなかった。動揺する外国人を机の下にもぐらせ、避難場所へ手際よく誘導してくれた。地震にここまで冷静に対処できる国は日本しかない（インドのビジネスマン）■数百人が広場に避難したが、毛布やビスケットが与えられ、男性は女性を助けていた。3時間後に人がいなくなった時、ゴミひとつ落ちていなかった（滞日中国人）■日本人の冷静さに世界が感嘆を覚えている（中国「環球時報」）■日本では、いくら街が廃墟になっても人々は自制心をゆるめず、わが街のために結束している。被災後の市民のふるまいには胸を打たれた（ハーバード大学サンデル教授）■阪神大震災を経験したニューヨークタイムズ元東京支局長は神戸で出会った被災者について「繁華街で店という店のガラスが割れ、商品が手の届く先に見えるのに、誰も盗もうとしない。救援物資を待つ列が長くて奪い合いすら起きない」「日本人の忍耐力、冷静さと秩序は、実に気高いものだった」と書き、「今後数日、数週間、日本を見ていよう。私たちはきっと何かを学ぶだろう」と付け足した。

様々なメディアで、こうした世界の人々の声が数多く紹介された。この世界の反応には、逆に日本人が驚いたのではないか。地震翌日の新聞には、駅の階段の両端に整然と腰掛けて、通る人のために中央を空け電車の開通を待つ人々の姿をとらえた写真が掲載されていた。しかし、これは多くの日本人にとっては当たり前な行動なのだ。多分誰もが同じ行動をとっただろう。阪神大震災、そして東日本大震災と、いずれの地でも厳しい条件の中、人々が秩序を守り互いに助け合い譲り合いながら行動している。冷静さと自制心を持ち、ルール・マナーを守り、他者への思いやりを持って行動する、これはまさに、日本人の本性なのだとすることを、世界の人々が感じ取った。そして、そうした日本人の行動のしかたに共感をもったのだ。

今、地球上では争いが絶えない。国と国、民族と民族、宗教と宗教が対立し命を奪いあっている。そうした中で見せた、一人ひとりが自分の生存権をそれぞれ勝手に主張するのではなく、他の人を思いつつ行動するという、そういう日本人の行動のしかたを、今こそ必要なものと世界の人々は感じたのではないか。これまで日本人は、多くの外国の人々から「顔がない」と言われ続けてきた。「笑顔を絶やさず、礼儀正しく、黙って運命に従う」、しかし「何を考え、どうしたいのかわからない」「個性に乏しい」というイメージを持たれてきた。それは多くの場合、否定的なものとして位置づけられてきたが、この「他を思いやる心」「助け合い共に生きる姿勢」は日本人の「新しい顔」になったのではないかという予感がする。日本人と世界の人々との新しいつながり方に期待したい。

（編集部）

この震災から学んだこと、学ぶべきこと これからの日本に必要なこと

多くの命、家々、学校、さまざまな仕事の場、懐かしい故郷を奪った3.11東日本大震災。関連して起きた原発事故はその処理の見通しもつきません。多くの人々が言葉にしがたい過酷な経験をしています。しかし同時にこの震災は、我々にたくさんの学ぶ材料を与えています。残された人々の再生のために、そして日本が元気を取り戻すために、この災害から何を学ぶべきか、何をこれからの課題とするか、教育はそれにどう貢献できるか、能力開発工学センターメンバーの現段階での思いをまとめました。

「想定外」発言に思う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小澤 秀子

福島第一原発の事故を巡って「想定外」という発言が相次いだ。事故がこれほどまでに拡大した最大の原因は冷却機能がダウンしたこと、「想定外」の大津波によって冷却水を送るための電気系統が破壊されたためだったという。M9.0の地震でも原子炉は想定通り自動停止し、原発の安全性は立証された。だが大規模な津波によって全ての電源が破損し、働かなくなるという事態は「想定外」だったというのが専門家たちの説明である。

しかし、この地域に大津波は過去に何回もあったし、地震学者たちは早くから地震と津波の危険性を指摘し「原発震災」を警告していた⁽¹⁾。全国に54か所ある原発周辺に住む住民は各地で原発の危険性を訴えて反対活動を行ってきた⁽²⁾。また、一部の原子力研究者もその危険性を報告している⁽³⁾。専門家たちが知らなかった筈はない。決して人知を超えた状況ではなく、わかっていながらあえて外したということになる。何故か？

「可能性があるものを全部組みあわせていったら、モノなんて造れない。どこかでは割り切るんです」これが、原発の監視役である原子力安全委員会（班目春樹委員長）の見解である⁽⁴⁾。「割り切る」とは費用のこと、千年に一度しか起きないことまで想定して安全対策をしたら、コストがかかりすぎる、これが大方の意見だったという。アメリカではスリーマイル島事故を受けて、30年前に見直しの指針を出し、安全規制を修正している。しかし、日本では指針に盛り込むことなく、経済性を優先させた。指針には、「長期間にわたる全交流動力電源喪失は、送電線の復旧又は非常用交流電源設備の修復が期待できるので考慮する必要はない」⁽⁵⁾とある。

かつて日本は、欧米各国からエコノミックアニマルというレッテルを貼られたことがある。戦後の廃墟から立ち上がるために国をあげて経済復興に力をいれていることに対して、アニマルとはひどいと憤慨した記憶がある。最近クールジャパンとか日本の文化に新たな関心が寄せられるなど、エコノミックアニマルの汚名は返上したかに見えたが、コストに拘ってとんでもない人災を起こしてしまった。残念であり、悔しい。

私たちは、今回の原発災害からさまざまなことを学びつつある。国策推進のしくみ、研究者の役割、文科省、マスコミの働きなど、すべてがこれほど明らかになる事例はない。ぜひ若い人や子供たちにも探究してもらいたい。神経を研ぎ澄まして真実をつかむ努力をしてもらいたい。そして、ゆめゆめコストに拘ってなすべきことを省くような愚をしないようにしたい。

(1) 石橋克彦・神戸大名誉教授「原発震災一破滅を避けるために」（1997.10『科学』）

(2) (4) 住民による訴訟（2011.4.15 朝日新聞）

(3) 小出裕章・京都大原子炉実験所助教「『原発震災』と原子力の黄昏」（2002「理論戦線」秋号）

(5) 「発電用軽水型原子炉施設に関する安全設計審査指針」（1990 原子力安全委員会）

電気の学習に取り組んできたものとして 矢口 哲郎

このたびの原発事故、そして計画停電という事態は、多くの人に大変な苦勞と不安と不満をもたらした。

不安と不満を大きくした原因に、電気を使う立場の人、つまり消費者が、発電、送電、電気利用といったことについての見識が不足していたということがあったように思う。そのため、停電に対する対応や節電ということに多くの人がとまどっていたように思う。家庭での節電と言っても、電気について定量的感覚はおろか、定性的な感覚も持たない多くの人にとって、表面的な情報に惑わされるばかりのように思える。

電気の利用という点で、多くの国民、人々が勉強すること、勉強してもらうことがある。原子力発電を続ける、やめるなど、〇か×かの単純なことではなく、現状をしっかりとつかんだ上で、電気をどのように作り利用するかを科学的に考えられる人間を増やすことは、大事なことだと思う。電気の学習を多く手掛けてきた当センターとしては、もっとそれに力をかけるべきだったと、悔んでいる。

電気の利用、特に家庭の電気利用の定量的な内容、そして発電。電気を作ることがいかに大変か、そして電気を送るときの損失等、それも定量的な見方が出来るようになること、単なる情報でなく経験として身に付けることを目標とする教材を開発し、教育をしていくことを考えていくべきではないか。これからのプロジェクトにしたいものだと考える。ガスも含めてエネルギー利用ということでもよいかも知れない。簡単なことではないかと思うが…。

原発副読本 榊 正昭

原子力発電に対する理解を図る目的で、文部科学省と資源エネルギー庁（経済産業省）が全国の小中学校に配布した副読本の内容が、福島第一原発の事故により見直されることになった。この副読本は、文科省ホームページからダウンロードできるようになっていたが、事故の後は削除された。

問題になったのは、「もし地震が起きたとしても、放射性物質をあつかう原子炉などの重要な施設は、まわりに放射性物質がもれないよう、がんじょうに作り、守られています。」（小学校用）「大きな津波が遠くからおそってきたとしても、発電所の機能がそこなわれないよう設計しています。さらに、これらの設計は『想定されることよりもさらに十分な余裕を持つ』ようになされています。」（中学校用）などの記述。実際には、事故は起き、施設は破壊され、放射能漏れが続いている。文科省は、副読本を年度内にも改訂するようだ。

しかし私は、この副読本をそのまま修正せずに日本中の子どもたちに配って欲しかった。なぜなら、この「原発副読本」は、情報をただ鵜呑みにすることがいかに危険かを学べる教材になるからだ。この副読本の記述と、実際に起こった事実とを一つ一つ照らし合わせ、その違いと理由を詳細に検証することで、今回の事故の本質が見えてくるはずだ。その上で原発のメリットとデメリット、原発のある地域の立場と電気の供給を受ける側の立場、それらの情報を集めてどうしたらいいか自分の頭で考え、皆で話し合う。政府に対して「安全か危険かはっきり示して欲しい」と要求するだけでなく、自分で考えることのできる人間を育てるためには、そういう事実に基づいたリアルな学習をするべきだと思う。

ニュース報道の限界と落とし穴 白尾 彰浩

新たな出来事、日常ではない事、刻々と変化する事態を伝えるのがニュースだ。当然と思っていたこのニュースの在り方が実は、真実をとらえる上では落とし穴となり、限界であることを、この震災が教えてくれた。

見ている側は、ニュースが事実であると思って見る。「信じがたい津波の映像」「その被害とつめ跡」「避難所の生活」「物資の不足」「炊き出しの開始」「お風呂のサービス」「がれきの撤去」「道路の開通」「物資の配給」「コンビニの営業再開」・・・報道につれて事態が進行し、日を追って少しずつ復旧が進んでいるように感じる。

それは、あながち間違いではないのだが、あくまで事実の一部。ニュースは変化の部分に目をつけて切り取ったものであって、実態とは大きな開きがあるのだ。この変化が起きているのは全体の中のほんの一部だ。5%、いや1%かもしれない。ひと月経っても電気、ガス、水道もなく、食事もままならず、ひたすら家族を捜している人々

が圧倒的に多い。しかし、その状況はあまり伝えられない。つまり、今回の震災のように、非常事態が長期間に亘って常態化した状況にあっては、ニュースは多くの実態ではない方を報道するという矛盾を生み出してしまふのだ。

原発事故についても同様だ。事故当初その状況と汚染状況は、刻々と伝えられた。新聞の紙面も、TV報道も原発事故関係が圧倒的な量を占めた。しかし、4月も半ば過ぎた今は、報道量は少なくなっている。しかし、「報道されない＝事実が消えた」ではない。それが証拠に、ある日突然事故の評価がレベル7に引き上げられたり、「放射能汚染水の漏えいは基準値の2万倍」といったニュースが報道されたりする。

起きている危険は継続しているのに、大きな変化がないとニュースにならない。「意図しない情報隠し」になってしまっているとも言える。放射能は目に見えず、臭いもない。人間が直接感じることはできないものである。そうであればなおさら正確な情報が、根拠ある数値データと共に提示され続けなければならない。

相撲や野球の話題が増えてくるのは悪いことではないが、報道が減ったからといって、厳しい被災生活は消え去ったわけではないし、原発事故も収束したわけではなく相変わらず危険な放射線の中での作業が続けられている。現実を直接確かめる手段は限られている。得られる情報の大半はニュース報道からだ。そのニュース報道の限界を理解しつつ、自分に何ができるのかを考えていくしかない。報道の裏にある現実を押し量る力と、思いやりがいま一人ひとりに求められているのだと思う。

経験からの学び方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・矢口みどり

今回の震災で起きた津波は、海岸地域で最高約17mの波、距離では4キロ、標高は最高約39mまで到達した（宮古市）という。報道には未曾有という言葉が氾濫したが、到達地点の過去最高は1896年の明治三陸地震の38.2m（大船渡市）、115年前にも同程度の津波があったということだ。三陸は巨大津波が頻繁に起きる地域で、1933年の昭和三陸津波でも大船渡市で28.7mを記録している。それらの経験は何故生かされなかったのか。

被害が大きく、亡くなった人が多かったのは、津波が地震発生後30分～1時間と早い時間に来襲した、谷状になっているため津波の速度が急速に上がった、道路などが地割れして通れなくなった、高齢者が多かった、などの原因が指摘されている。しかし、最大の原因は、住居や仕事場が浜に近い低地にあったということ、避難場所にできる高い建物がなかったということであろう。

ところが、今回の津波で全戸被災を免れたところがある。大船渡市綾里（りょうり）白浜地区。綾里は明治三陸津波の最高到達点を記録し、被災家屋296戸死者1350余名という壊滅的被害を受けた、まさにその地である。津波後、同地区では住居を全て、そのときに残った住居より高い場所へと移した。そしてそれ以来地震があると、まず安全と思う高い所へ逃げる、そこで観察し危険と思ったらさらに高い所に逃げる、というようにしてきたという。津波の怖さを言い伝え、行動のしかたを教え伝えてきたのである。10年に1度のことなら自分が経験した記憶の範囲のことであるから行動できる。しかし100年に1度となるとその人の経験の範囲を越えてしまう。地震→津波→避難、それを住民一人一人の行動力としておくための伝え方、学び方の差があったということではないか。

被災を免れた理由はもう一つある。綾里地区の電柱には「災害は忘れたころにやってくる」の文字と共に38.2mの高さを示す明治三陸津波水位表が掲示してある。この地区は津波防災の目標をこの高さに置いたのである。津波の多い三陸では防災意識も高く、津波の高さを想定した対策や訓練をしてきた地域も多い。しかしその想定は、それぞれの地域における過去の経験が土台になっていた。綾里も同じく経験を土台にしていたが、それが過去最高の高さであったために、被災を免れたのである。（同地区における今回の津波到達点は約24m）

地震はいつも同じようには起きない。震源が自分の地域に近くマグニチュードが大きければ、津波も大きくなる。地震の経験を、「その人の経験」「その地域の経験」ととどまらせず、単なる「言い伝え」に終わらせない学び方を工夫しなければならない。幸い今回は、明治、昭和の地震の経験では得られなかった有利な条件がある。それは、科学技術とメディアの発達により、映像を始めとする膨大なデータを得たということだ。震源地、地震の大きさ、各地の津波の高さ、速さが記録に残り、それらをもとに震源地からどのようにエネルギーが伝わり、各地をどのように津波が襲ったかを研究者たちが解析した結果を動画で見ることでもできる。（東京大学地震研究所のサイトなど）それらを材料とし、科学的な視点を自分たちのものとし、あるべき町の姿を設計し構想する力、災害に対応する具

体的な行動する力とするための学び方を提案し実践するのが教育者の課題ではないか。数十年のうちの東南海地震の発生は確実視されている。これは早急な課題だ。

人とつながる社会 叶内 盈子

この震災では、数多くの人々、特に若い人々が「仲間と支え合うことの大切さ」を強く感じたようだ。募金活動をする人、ツイッターを駆使して被災地に情報を届けようとする人、被災地へ物資を集め送る NPO グループ、被災地で直接支援にあたるボランティアたち。

「被災地では、全ての方々が丸となり、仲間とともに頑張っておられます。人は仲間に支えられることで、大きな困難を乗り越えることができると信じています。(中略)生かされている命に感謝し、全身全霊で、正々堂々とプレーすることを誓います」という選抜高校野球創志学園野山主将の宣誓や、街頭インタビューでの、被災した地域に派遣される予定だという左官職の若者の「今までは、ただ給料もらうために仕事していた。今度は人のために仕事ができる」という言葉。そこにもその思いがあふれていた。

こうした人々の思いや行動はこの震災で急に発生したものではないように思う。日頃の思いや、地道な活動があって、今こうした大きなエネルギーになっている。単に生活のためにお金を稼ぐのではなく、もっと人と社会に関わりたい、誰かの役に立っているという実感を求めていると感じる。プロボノ活動に参加する若者、社会企業家をめざす若者が増えてきているということもその表れだろう。孤立社会といわれる日本社会、その中で支え合いを求めて若者たちが活動している。その動きを育て、人々がつながる暖かい社会へと変えていきたいものだ。

新たな目標へ 矢口みどり

自然エネルギーへの移行の声が高き上がる中で、電力供給の30%を占める原発をなくせば、電力不足で産業が停滞し復興への力がなくなってしまうという声も大きい。が、本当にそうなのだろうか。

各家庭に節電が呼びかけられた 3/13 日以来、我が家では暖房は切り、重ね着し厚い靴下をはいた。2本組の蛍光灯は 1 本だけにし、昼間はなるべくつけないようにした。トイレ便座の暖房は切りカバーをかけ、使わない電気機器のコードを抜き、その他いくつか節電対策をとってみた。その結果、3 月は約半月で 2 月より 71kwh 減、1 か月分にすれば 140kwh でこれは 2 月の電気使用量の 33%分だった。3 月は例年になく寒かったので、何もしなければ 2 月並みに電気は使っていたところだ。

すごい節電対策をしたかのようなのだが、実は無理でもなんでもなく、気密性の高いマンションでは暖房なしでも寒さは十分しのげだし、電灯の明るさが半分でも困ることはなかった。地デジ移行で TV をブラウン管から液晶に変える予定の我が家では、これで夏のピーク時に向けても 25%削減の見通しがついたが、同時に、これまでいかに電気を安易に使ってきたかということを実感した。

より便利な、より快適な、より楽な生活を目標とし、その追及の結果が、今日の産業・経済をつくりあげてきた。消費者である多くの国民もその中に浸ってきた。しかし、その背景に大きな危険を抱えているとわかった今、それをそのまま進めるわけにはいかない。今がエネルギーの使い方を見直すチャンスではないか。今なら、生活の仕方をも含めて全国民で考えていくことができる。既に考え始めたところもあり、大手デパートから、LED 証明に置き換え事務機器を複合機にすることで、店舗の室温を上げずに 25%節電を達成するという発表もあった。

「時間軸をずらせば、どの企業にも同じ問題がおこる。それに真剣に取り組めば、早くその問題を解決することができるので、かえって運が良かった。」30 年程前、高齢化対策に苦慮した企業に対して今は亡き藤田廣一氏 (当時慶応大学工学部教授) が語った言葉である。エネルギーの問題は、途上国のレベル向上に伴っていずれ世界的な課題となってくる。その時の手段が原発でよいのか。問題となった時に新たな安全な方向を示せるように、リーダーシップが取れるように今から舵を切っておく。一時的には後退しても、日本人の頭脳と技術力は、エネルギー不足を逆手に取った製品開発の道をきつと切り開いていこうし、また方向を転換し視点が変わること、新たな視野も開けるはずだ。

仙台市ガス局、がんばっています

東日本大震災で仙台市ガス局管内（仙台市と周辺7自治体）では、約31万戸でガスが供給停止。全国51のガス事業者からの応援を得て、開栓や修繕の作業に取り組みました。能開セミナー卒業生の庄司陽一さんより寄せられたメールからその活動状況の一端をお伝えします。

① 3/27 地震お見舞いメールへの返信

お見舞いありがとうございます。都市ガス復旧準備で職場に泊り込んでいました。（JRストップ、ガソリン不足で、食料なし）家族、自宅は無事です。報道されている沿岸部は壊滅状態ですが、市内はほとんど被害が見えません、津波の被害が想定外でした。ガス工場も壊滅状態でした。が、幸い新潟からのパイプラインが健全で、そちらからの供給で東京ガス、大阪ガス、東邦ガス、西部ガスと地方ガス会社含めた2700人体制で復旧にあたっています。4月末完了をめどに頑張っています。（中略）大津波は日本沈没映画、パニック映画そのもので、実際に起こりました。関東にもいろいろ影響が出ています。余震もあります。お気をつけください。準備をしていたものの自然災害を甘く見ていました。（中略）自宅ネット回線が調子悪く、本日メールを拝見いたしました。 〈仙台 庄司〉

② 4/1 TV報道された仙台ガス局の復旧活動の様子を見てのメールへの返信

お晩です。ご心配をおかけしております。私の職場の3階からの生中継でした。現、技術センターは天然ガス転換調整員教育を実施した建物です。（小澤先生、白尾さん、叶内さんがいらしたことがあります）

ガス業界は天然ガス転換*つながり、災害時の支援体制など事業者間の絆が強く、現在、全国のガス会社一丸となって復旧に臨んでいます。今技術センター（旧研修センター）は、復旧本部となり事務室のみ仙台で、その他の実習室はすべてテレビ放送の通り他事業者の作業場となっています。調整員教育以来のにぎわいです。現在、応援作業者は2700人、仙台市ガス500人の3200人体制で作業しています。この建物に3200人いるわけではありません。

私は昭和53年の宮城県沖地震の経験、平成7年の阪神大震災の復旧応援経験があり、作業の流れはつかんでいるつもりでしたが、想定外の大津波がありガス工場が壊滅状態となりました。毎年、災害訓練をしていましたが、形骸化してあまり役立ったと言えませんでした。その辺の災害訓練方法など復旧が完了したら、考える必要がありそうです。全面復旧にはもうしばらくかかりますが、落ち着いたら、今回の東日本大震災についてお話しできたらと思います。津波警報が出たら、振り返らず、できるだけ高台に逃げるが教訓でした。

家族、建物は無事です。ガソリンが無いのが困っています。復旧作業にも影響しています。電気、水（止まらなかった）、ガス（うちはプロパンガス）でライフラインはあまり困りませんでした。お店がやっていないので、冷蔵庫が空になり、ある程度の備蓄は必要だと思いました。米もなくなり農家の同僚から購入しました。米さえあれば何とかあります。これも実感しました。ガソリンも6時間ならんで入れました。いろいろ学習しています。余震、原発と皆さんもお気をつけください。お見舞いありがとうございます。 〈仙台 庄司〉

③ 4/2 交代休みの日に

復旧は長丁場となりそうなので、本日は交代で休みとなっています。午前中は病院をはしごして薬（持病＝生活習慣病）を調達してきました。食べるものが無くだいぶ痩せましたが（ダイエットになった）、コンビニ、スーパーも開いてきています。並ばなくても買えます。本日はイオンにいきまして、冷蔵庫もだいぶん回復してきました。

JR壊滅、仙台空港の津波被害、燃料不足、物流ストップなど、効率を求めすぎた、現代の都市機構のもろさが露呈されたと思いました。想定外であります。こんなことが起きるのです。戦争でなかったのが救いですが、都市機能は徐々に回復にあります。JRも近郊の運行が始まりました。東北新幹線は4月中には開通しそうですが、津波被害のあったところはしばらくかかるのではないのでしょうか。下水の処理施設も壊れたため、水、ガスが復旧しても、水使用の制限が求められています。私も定年まで後5年となりましたが、復興という仕事を与えられたという気がします。10年単位の仕事かもしれません。

明日からの一週間がガス復旧の山場となります。応援のガス会社さん（3000人）に感謝してまた頑張りたいと思います。能開セミナー教え子*はそれぞれの部署で頑張っています。ではまた落ち着いたら連絡致します。 〈仙台 庄司〉

④ 4/9 最大余震M6強の日

今晚は、余震が来ました。一部の地区のガスが再度止まりました。いろんなことが起こりますね。想定外です。ガスの復旧、東北のガス会社の復旧、仙台市の沿岸部の復興、宮城県の復興、東北地方の復興、福島大変です。いまこそ探究心が必要です。日本は乗り越えられるでしょうか。不安です。元気を出してがんばります。 〈庄司〉

⑤ 4/17 仙台市太白区に住む人からのメールを、激励のことばを添えて、庄司氏に転送

昨夜遅く、太白区に住む友人から喜びのメールがきました。

「今日やっとガスが開通しました！これで大分平常の気分に近くなれそうです、余震も前よりかなり少なくなったし。(中略)全国のガス会社の方々にほんとお世話になりました。この辺りは、閉栓は東京ガス、道路での管の修理は東邦ガス、今日の開栓は広島ガスの方でした。開けるときはちょっとびくびく、お湯がでたときは感激でした、あんなに何でもなく使っていたのにね。早速久々に家でのお風呂、幸い余震もなくのんびりとなりました。ガス工事自体は海の近くでは手付かずの様子、まだまだかかるのでしょうかね。」

ほんとに全国のガス会社が協同して全力で復旧に当たっている様子がわかります。余震もあって、まだまだ工事は大変なようですね。中核部隊の庄司さんはさぞお疲れでしょう。ほんとにご苦労さまですが、引き続きのご努力、どうかよろしく願います。(疲れすぎないように頑張ってください。) 〈小澤〉

⑥ 4/18 復旧隊解散の翌日に

おはようございます。小澤様、お友達のガスの復旧、お待たせいたしました。太白区八木山地区の方ではなかったでしょうか。全国51事業者4200名の復旧隊でした。(全事業者数200数社)昨日解散式を行い、一応の復旧が完了しました。まだ、3000戸ぐらい継続して作業している地区があります。工場の復旧を除いて、連休明けぐらいまでかかりそうです。これからが、本番かもしれません。体調に気をつけがんばります。余震が関東方面に移ったような気もします。お気をつけください。ではまた。 〈庄司〉

★ガス業界は

天然ガス転換つながり

ガス業界では1960年代の末から約40年にわたって天然ガス転換という一大事業が行われたが、その調整員教育はすべて最初に能開方式(シミュレータを行動対象とするプログラム学習方式)を取り入れた大阪ガスの強い薦めによって能開方式で実施された。指導に当たったトレーナーの主力メンバーは能開センターのセミナー卒業生である。

★4/17 復旧対策隊、解散

17日仙台市宮城野区のガス局庁舎で行われた解散式には、事業者ごとの色とりどりの作業服姿の同隊作業員約300人が出席。市長の感謝の言葉に対し、石川哲夫対策隊長(大阪ガス)は「励みになったのは市民からのねぎらいや感謝の言葉。仙台の復興は始まったばかりで、今後はそれぞれの形で復興の応援をしていきたい」と応えた。なお、一部の事業者は残って、残る地域の復旧に当たるという。

《追悼》 金子いづみさん

この震災で、能力開発工学センターは大切な仕事仲間、金子いづみさんを失いました。地震のあったその時刻、講師をしていた専門学校の卒業式が九段会館で行われていたのですが、地震で天井が落下、列席していたいづみさんを直撃したのです。



この報に接した時、私たちは言葉を失いました。

能力開発工学センターのWeb 資料館の構築は、いづみさんの力なくしては成り立ちませんでした。他の仕事で忙しくしばらく中断していましたが、新年度になったら内容の充実化に取り組む予定で再開を連絡、いづみさんから「楽しみにしています」というメールをいただいたところでした。

●いづみさんは不思議な人でした。何を頼んでもここにこして「喜んでやらせていただきます」と引きうける。多くの仕事仲間に出会いましたが、だれとも違う貴重な個性でした。 (小澤秀子)

●テレビ局でもどこでも物怖じせず出かけてインタビューしてくるなど行動的でした。話合いが詰まると、視点を変えた提案をしてくれる……。しなやかだけど芯の強い、周囲を心地よい雰囲気にしてくれる人でした。 (叶内盈子)

●スロバキアとの山村交流、日本のシュタイナー学校の支援などなど、活動が実に幅広く、いつもたくさんの刺激をくれました。 (矢口みどり)

心よりご冥福をお祈りいたします。



この国の失敗の本質

表題は柳田邦男氏の書名(講談社文庫 2000年)。1990年代に書いた37の評論に、書き下ろしの「この国をどうすればよいか」を加えて構成したものである。バブル経済崩壊後に次々と起こった行政、銀行、大企業等の指導層の失態、事故、震災、医療問題、少年事件等、いわば失敗の歴史の分析を通じて著者がとらえたものは、「戦後

日本が半世紀をかけて温存し深めてきたシステムの欠陥であり、指導層のゆがんだ価値観」であった。

東日本大震災という、戦後最大の危機の真ただちにいる日本、自然災害のもたらしたものに被害を大きくしている背景に、著者の指摘する「システムの欠陥」「指導者層のゆがんだ価値観」の存在が少しずつ見えてきているように思う。この危機を乗り越えるために、また日本の転換のために、われわれ日本人は何をどう変えなければならないのか、失敗をどう修正していけばよいか、その視点と行動の方向を得るための書と思う。

節電ポスター

インターネットで、「節電ポスター」という運動が展開された。東北地方太平洋沖地震による深刻な電力不足に対し、日本中のデザイナーたちが有志で制作した「節電の呼びかけポスター」の展示サイト。計画停電が予告されたその日、3月13日からスタートしている。サイト内のコンテンツはデザイナーたちの計らいにより全てパブリックドメインとなっており、許可を取ることなく、誰でも自由にダウンロードし、編集・コピーして配布することができる。粋で、しかも素早い。しかも、なかなか素晴らしいデザインばかり。これがプロの仕事だ。(仕事ののろいどこかの誰かさんたちに爪の垢を煎じて飲ませたい!)

ほんの一部だが下にご紹介する。計画停電はもうやらないらしいが、今夏の東日本は電力不足に備えて一般家庭から産業界まで節電に取り組む必要がある。ぜひ、ご活用を。

<http://setsuden.tumblr.com/> (サイトは他にもあり)

みんなで分け合えば、できること。

12ロール	→	1,000人分
10リットル	→	4人分
1斤	→	1家族分
1本	→	10人分
5kg	→	120人分
1冊	→	100人分

食品、日用品の買いすぎをお控えください。分け合う気持ちを大切に。
2011 東北地方太平洋沖地震

2011 東北地方太平洋沖地震

電気を消して
希望を灯そう。

東北地方太平洋沖地震の発生後、東北地方で電力が不足しています。節電にご協力をお願いします。

みんなができる。みんなである。

思いは届かなくても、
思いやりは届く。

入れよう! 思いやりのスイッチ

OMIYARI

東北地方太平洋沖地震により、東北地方で電力が不足しています。節電にご協力をお願いします。

「買い占め」どうか、お控えください。

繋がります!
ハートがハートを。
パニックがパニックを。

2011 東日本大震災

≪編集後記≫

「100,000年後の安全」というフィンランド映画が評判を呼んでいる。危険性が10万年続くといわれる高レベル放射性廃棄物を、地中深くの堅い岩盤内に埋め込んでしまう放射性廃棄物最終処分場「オンカロ」建設のドキュメンタリーだ。10万年後の人々にその危険性をどう伝えたらよいか、その工夫をしながらも苦悩する関係者たちを描いた作品。

★隣人愛より高い愛は、最も遠いもの、未来に出現するものへの愛である

ニーチェ『ツアラツウストラはかく語りき』より M

財団法人 能力開発工学センター

〒203-0042 東京都東久留米市八幡町 1-1-12

TEL:042-473-1261 / FAX:042-473-1226

<http://www.jadec.or.jp/>

<http://jadec.jp/> (資料館)

E-mail: info@jadec.or.jp